

1 今年度の取組目標と自己評価

(1) キャリア教育

① 進学型総合学科高校として、「25歳の自分創り」を組織的、計画的、系統的に進めるために、課題研究をより充実したものとするべく、1年次の「産業社会と人間」、2年次の「人間と社会」、3年次の「課題研究」について、3年間のキャリア教育の計画を再構築しながら、さらなる充実を図ってきた。

② 生徒一人一人のキャリア実現のために、1年次「産業社会と人間」において、自己分析から自己理解を深めた上で、自己表現力の向上を目指してプレゼンテーションを多く取り入れてきた。

2年次「人間と社会」において、アクティブインタビュー方式で職業人講話インタビュー（主に卒業生）を行い、具体的な職業観を考える機会を与えた。また、エアオープンキャンパスのプレゼンテーションを通して進路実現のためのイメージ作りを行った。

3年次「課題研究」において、生徒一人一人がテーマを設定・研究をして、論文作成・プレゼンテーションを行った。この研究が進路に直結した生徒、興味関心を深めた生徒、趣味程度から深めたことで進学先の研究に繋げた生徒などがいた。

③ 現2年生以下の「課題研究」は、スタートが2年次の3学期では遅いと判断で、できる限りの前倒しでのスタートを模索してきた。例年2年次のみを実施していた「課題研究校内プレゼンテーション」を1年次でも実施し、早期取り組みの動機づけを行った。

④ キャリア教育の充実のためにNPO法人等との連携を図り、「産業社会と人間」の授業において、「ドリームプラン・プレゼンテーション」を実施した。

⑤ 生徒のそれぞれのキャリアデザインを積極的に支援するための方策を図るため以下を実施ア 「25歳の自分創り」を軸としたキャリア教育の充実を引き続き行ってきた。

イ 3年次希望者はオンライン個別学習を活用して、学力の定着及び伸長を図った。

ウ 今後の入試制度を視野に入れ、GTEC全員受検、英検受検を促し、英語の4技能の育成を図った。

⑥ 大学進学者のうち現役実合格者数は、国公立【昨年度0名⇒2名（国立1、県立1）】、早慶上理【昨年度0名⇒1名（東京理科大）】GMARCH【昨年度9名⇒23名（学習院1、明治8、中央11、法政3）】、日東駒専【昨年度14名⇒27名】と大幅に増加した。

⑦ 学校推薦型選抜推薦入試・総合型選抜等での入試は増加している。122名（昨年度81名）が推薦受験をして107名（88%）が合格した。合格者のうち第一志望に進学する生徒は90%（昨年度90%）となった。高い水準を維持している背景に、一昨年度から実施している「生徒一人一人に全教員が関わる」をテーマに「小論文指導」、「面接指導」を全教員の協力のもと行ってきたことがあげられる。

⑧ 今後の入試において、検定試験の重要度が高まるなか、GTEC全員受験等により生徒の

意識が変わってきている。また、英検受検を促してきた結果、準1級合格者1名、2級合格者24名、準2級合格者47名であった。

- ⑨ 看護系合格者は17名（昨年度17名）で、大学7名、専門学校10名であった。
看護師や助産師になるという夢を諦めず最後まで粘り強く勉強し続けた生徒もいる。

（2）学習指導

- ① 「Society5.0に向けた学習方法研究事業」の指定を受け、全生徒へ一人1台端末を貸与し、活用について指導しながら、学校全体で、効果的な校内研修会の実施や相互の情報交換等、組織的に取り組み、全教員がICT機器を活用した授業を経験した。
分散登校等の機会にオンライン授業も全教員が実施し、学校全体のICT機器スキルは大きく向上した。
- ② 「主体的・対話的で深い学び」は、ICT機器の効果的な活用など、個々の様々な工夫により、効果的な事例が増加している。
- ③ 全定合同の授業見学期間を設定し、一人あたり2回以上の授業見学を実施した。また、初任者研修、2年次研修、3年次研修、中堅教諭等資質向上研修Ⅰの対象者等の授業研究を各学期1回設定し、それぞれ研究協議を実施した。（年間計31回実施）
- ④ 生徒のキャリア実現のため、長期休業中における講習をすべての年次で実施した。また、放課後等の講習・補講、2週間前指導を実施した。
- ⑤ 全教科において、3観点に基づくルーブリックの導入・試行に向け、先行している教科からの報告・共有により、学校全体の準備が大きく進んでいった。

（3）生活指導

- ① 毎朝の校門指導で、生徒の健康状況の確認とともに、挨拶及び身だしなみ指導を徹底した。
- ② ノーチャイム制の徹底を図り、キャリア教育の一環として、社会人としてのマナー、基本的な生活習慣、規範意識等、全体集会、学年集会、各ホームルーム等において指導を行った。
- ③ いじめ未然防止、体罰根絶、人権教育、サービス事故防止等に関する校内研修会を2回（7月、12月）実施した。
- ④ 特別指導件数は、2件（昨年度0件）であった。
- ⑤ 転学者数14名（昨年度5名）。今年度は3年次1名、2年次4名、1年次9名と、昨年度より大幅に増加している。理由は個々により様々で、やむを得ないものであったが、次年度に向けて課題となった。

（4）特別活動

- ① 新型コロナウイルス感染症の影響で、感染防止を最優先し、体育祭は年次ごとの開催、文化祭は延期してオンライン中心で外部公開なしの開催、合唱コンクールとマラソン大会は中止とした。
- ② 東京オリンピック・パラリンピック大会は、開催にあたり、アーチェリー観戦が決定した。
観戦実施のための様々な準備を進め、実地踏査を終了させたうえで、希望者を募っている最中に、感染拡大による規制のため、中止決定せざる得なくなり、観戦中止とした。

- ③ 「国際理解教育」を充実させるため、東京都教育委員会から「国際交流リーディング校」に令和3年度から令和5年度まで3年間再指定されている。また、「海外学校間交流推進校」に指定され、交流校を探す予定ではあったが、新型コロナウイルス感染症の影響により渡航することができず、海外に出向いての現地踏査等の準備は全くできなかった。

9月より、国際交流事業として、フィリピン国バギオ市国立科学高等学校との学校間交流を、「TegaMail テガメールプログラム」として実施中である。

(5) 保健活動

- ① 新型コロナウイルス感染症の感染防止対策を、学校全体で組織的に行った。
時差登校（8時55分登校・45分授業）を継続実施し、生徒登校時は、毎朝健康観察と検温チェック、教室等の消毒、換気の励行、昼食時の黙食指導等を行った。
- ② 生徒の精神面の支援のため、教育相談センター、児童相談所、子ども家庭支援センター等、外部機関との連携を密にして、個々に応じた対応を行った。
- ③ 特別支援教育委員会を週1回定例開催（年間25回実施）し、特別な支援を必要とする生徒をはじめ、見守りが必要となる生徒の情報共有を行い、支援の方法についても検討を行った。

(6) 広報活動

- ① 新型コロナウイルス感染症の影響で、制限の多い広報活動となった。授業公開や文化祭の一般公開等はできなかったが、予定していた学校見学会や学校説明会を規制に従った感染対策を徹底して実施したほか、全教員による中学校訪問を実施し、可能な限りの出張説明会（中学校・塾等）に参加した。また、臨時の小規模学校説明会も夏季休業中に40回実施した。
- ② 生徒で組織する広報委員会等も積極的に活動し、学校見学会や学校説明会では、その時々での可能な範囲で、説明・案内・誘導等で活躍した。また、広報動画の作成や校内案内の冊子作成など、重要な役割を果たした。広報活動において生徒の活躍は大きな効果をもたらした。
- ③ ホームページは大幅に内容を精査・改善させ、本校の魅力を発信していた。270回以上更新し、アクセス数は約11万4千回であった。
- ④ 入学者選抜においては、1学級増となったが、推薦に基づく選抜では、倍率2.43倍（前年度2.65倍）、学力に基づく選抜では、倍率1.07倍（前年度1.01倍）となった。
残念ながら学力入試当日の欠席等が多く、二次募集を実施して定員を充足した。

(7) 学校間連携や地域との連携を図る

- ① 学校間連携や地域連携に関しては、新型コロナウイルス感染症の影響で、関係各所との様々な連携を中止や延期とすることになった。その中でも、下里中学校との連携をはじめ、感染対策等を工夫して、可能な範囲で連携を実施できたケースもあった。
- ② 避難訓練では、3月に東久留米消防署に御協力をいただき、1年次全員対象で、体験活動を中心とした「地域と連携した防災訓練」が実施できたことは、学校及び生徒にとって貴重な機会となった。

(8) 学校経営・組織体制

- ① 年度当初、企画調整会議と職員連絡会の年間予定を決定し、企画調整会議の適正実施と、企画調整会議と分掌との双方向性を推進した。
- ② 教育課程上の課題や新しい教育課程への対応の取り組みは、大きく進展した。
- ③ Society5.0に向けた学習方法研究校として、ICT機器等を活用した学習指導方法や校務について研究を進め、担当者及び先行している教員の牽引により、ICT機器の活用は大幅に進んだ。校務においては職員連絡会のペーパーレス化やオンライン会議の実施等、事務作業の効率化と時間短縮を図ることができた。

2 学校評価アンケートの概要

学校評価アンケートについて、評価の実態が分かるように、生徒、保護者、教職員への質問を20問、地域へのアンケート項目を10問にしている。

- (1) 生徒の「学校満足度」を問う質問項目（「私は、東久留米総合高等学校に入学して良かったと思っている。」）では、肯定的評価（5段階評価の「5」または「4」）は、1年次75%（昨年度66%）、2年次51%（昨年度57%）、3年次67%（昨年度56%）であった。入学して良かったと、肯定的に捉えている生徒が、2，3年次は昨年度に比べて高くなった。

保護者の「学校満足度」を問う質問項目（「私は、東久留米総合高等学校に子供を入学させて良かったと思っている。」）では肯定的評価が、1年次88%（昨年度78%）、2年次80%（昨年度83%）、3年次88%（昨年度78%）であった。

- (2) 学習満足度については、「本校は、生徒の学力向上のために教材などの工夫を凝らした授業を行っている。」では、肯定的評価が1年次77%（昨年度58%）、2年次60%（昨年度55%）、3年次64%（昨年度50%）であった。

「本校は、しっかりとした学力が身に付くような指導がなされている。」では、肯定的評価が1年次79%（昨年度66%）、2年次54%（昨年度58%）、3年次61%（昨年度61%）であった。

「本校の教職員は、わかりやすい授業を常に心がけている」では、肯定的評価が1年次64%（昨年度54%）、2年次55%（昨年度59%）、3年次53%（昨年度34%）であった。

「本校の授業は、ICTの活用や生徒の主体的な学習の取組みに積極的である。」では、肯定的評価が1年次68%（昨年度64%）、2年次64%（昨年度55%）、3年次55%（昨年度46%）であった。

- (3) キャリア教育の項目「本校の「産業社会と人間」を中心とするキャリア学習により自分自身の進路に対する関心が高まった。」では、肯定的評価が1年次85%（昨年度78%）、2年次72%（昨年度71%）、3年次74%（昨年度60%）であった。

- (4) 生活指導の項目「私は、本校の校則や指導に従った学校生活を送っている。」では、1年次94%（昨年度93%）、2年次85%（昨年度87%）、3年次87%（昨年度82%）であった。

(5) 地域の方のアンケートでは、すべての項目で『わからない』が多く（10項目中5項目で一番多くなっている）、地域との連携の推進は、重要であるため、可能な範囲で行っていく。

3 次年度以降の課題と対応策

(1) キャリア教育の充実

- ① 新教育課程の2年次選択科目を、より総合学科らしい内容として完成させ、履修指導を適切に行う。
- ② 課題研究のより一層の充実に向け、早期の導入と意識づけを行い、今後のキャリアにおいて自身の強みとなるよう支援していく。特に推薦入試において活用することを視野に入れ指導する。

(2) 学習活動の充実

- ① 生徒の実態に応じて、主体的・対話的で深い学びを効果的に実践し、協働的な学びを推進するとともに、生徒の学力を向上させる。
- ② ICT機器や生徒一人1台端末を活用し、個別最適な学びを推進するとともに、より効率的で効果的な授業を展開する。一人1台端末の活用し、個別最適な学びを推進するとともに、より効率的で効果的な授業を展開する。

(3) 特別活動（生徒の主体的活動のより一層の充実）

- ① 生徒会活動・委員会活動を支援し、生徒自身の自主的・自律的な活動を充実させる。
- ② 体育祭、文化祭、合唱コンクール、球技大会などの行事では、生徒の主体的な活動として、自律した運営ができるよう指導・支援していく。

(4) 広報活動の充実

- ① 全職員が総合学科である本校の特色と魅力を理解し、学校全体で組織的に広報活動を実施する。学校見学会、学校説明会、都立合同説明会、個別相談会、授業公開、出張授業、体験授業等は、総務部が統括し、経営企画室を含めた全教職員体制での計画的・組織的な運営を図る。
- ② 学校見学会や学校説明会は、生徒による主体的な運営の確立を目指し、指導・支援する。
- ③ 夏季休業中を中心として、通学圏内の中学校訪問、塾訪問を全員体制で実施する。また、中学校の上級学校説明会等に積極的に参加する。
- ④ 部活動や生徒の様子を中学生に理解してもらうために、体験部活動を組織的に行う。
- ⑤ ホームページをリアルタイムに更新し、内容の充実を図る。